

宅患者の収容を含めた無ライ県運動へと進む。だが、そこでは病の伝染力が必要以上に誇張され、人々の恐怖心を利用した強制収容のあたりがとられた。患者の人権を無視した療養所生活は戦後までつづき、今日でも隔離によってハンセン病を撲滅させようとする政策が継承されており、退所者に対する保障は全く考慮されていない。

著者は近現代におけるハンセン病の歴史を、一九〇七年の「らい予防に関する法律」の制定から一九三一年公布の「らい予防法」、さらには一九五三年の「らい予防法改正」の成立に至る国会での審議過程を議事録などによって詳細にあとづけ、その当時の状況を生き生きと描き出している。委員らの質疑応答・証言を巧みに挿入し、臨場感のあふれたものになっているが、さらに興味を持って読めるものにするには、それから法律に裏付けられた医療・衛生行政が患者に何をもち、どんな意味が新たに付与されることになったのか、患者側（患者を出した家族や村を含む）の史料あるいはマスコミの記事などをもって、患者や家族の生活を浮き彫りにした章節が加えられる必要があると思われる。

なお、救済事業が皇室の慈悲的性格を帯び、天皇制護持の一翼を担わされていたこと、ハンセン病者の断種が日本民族の浄化をめざす優生政策に結びつけられようとしていたことなどの点については、藤野豊著『日本ファシズムと医療』（岩波書店、一九九三年一月刊、六七〇〇円）が意欲的に取組んでおり、癩の社会的な意味と患者の生活にふれた沢野雅樹著

『癩者の生』(書弓社、一九九四年一月刊、二六七八円)も刊行されているので併読されることを願う。いずれの書もたいへんな労作であり、これらによってわが国におけるハンセン病患者の実態だけでなく、近現代における医療政策の立案過程と基本姿勢が明らかになったことは大きな収穫である。

(新村 拓)

〔東京大学出版会・東京都文京区本郷七―三―一東大構内、〇三一三八―一―八八一四、一九九三年一月刊、A5判、三五六頁、八七五五円〕

蒲原 宏著『新潟県医学史覚書』

本書の最初に書かれている「はじめに」を読んでみると、本書の成り立ち、すなわち著者が幼少の時代からいかに歴史の重要性に興味を覚える環境に育ったかが詳しく記されている。しかし環境がいかに良くても、これを受け入れる態勢を整わなければ単なるあだ花に終わってしまう。著者はこれらをうける意欲と人一倍の向学心があったため、立派に開花する結果となった。医学生時代から医史学に興味を覚え、整形外科を専門としてからは、該科と郷里の新潟関係の医学の歴史には特に意を用いるようになり、数々の著書や論文を出されたことは人皆の知るところである。

本書は著書名が「覚書」と明示されているとおり、内容は十八項目、百六十余篇の「おぼえがき」から成り立っている。

項目の区別は必ずしも画然としてはいないが、読みやすくするための分類と思われる。「あとがき」を読むと過去四十数年にわたって、四百篇の論文を書いたというから、明日にでももう二冊の「新覚書」が刊行可能の計算となる。

内容のトピックスはきわめて広範多岐にわたっている。「書籍」としては有名書のエピソード、惜しくも散逸してしまつた無名書。「人物」はもちろん医師が大部分だが、日本人、外国人、有名人、無名人、さらに医師の名簿として門人録、門籍録、門下生、人名録等が幅広く引用されている。「病氣」としては地方病、ツツガムシ病、くる病、梅毒、疫病、コレラ、陽チフス、赤痢、精神病、種痘など。「病院」としては施薬院、狂疾院。「薬」としては目薬、毒消し、熊の胆、ほねつぎの薬、採薬など。「碑」としては石碑、墓碑、筆塚など。さらに医学教育、医療事故、法律、診断書、免許証、法度書、戊辰戦争ほか多数である。

これらのテーマは我々の周囲にあつても、つい見過ごされやすいものである。それを著者は足をもつてオリジナルの場所を訪れ、眼とペンをもつて確実に捕らえ「覚書」とする。必要に応じて図書館や公文書館へ通うのもやぶさかでない。しかも日本国内だけでなく国外出張も敢えて辞さない。私はかつて著者から、ほんの數行の史実を調査するためだけにロンドンまでいったと聞いてただただ驚きいつたことがある。公私ともに多忙を極める彼がどうして可能かと疑つた。

本書は新潟県だけのものに特定しているが、決して一地方

のものでなく、全国に共通する話題を提供している。さらにひき続いて、第二、第三の「覚書」を刊行されることを希望する。

(大滝 紀雄)

〔新潟雪書房・新潟市浦山三一一二八、電話〇二五—二六七—九二〇五、A5判三三〇頁、二五〇〇円〕

長谷川正康著『齒の風俗誌』

本書は「齒の風俗史」ではなく、「齒の風俗誌」である。手許にある辞書をみると史は文書または歴史、誌は書き残す記録、風俗はその社会の衣食住などのならわし、風習とある。

本書の内容をみると、第一話 齒にまつわる民俗風習、第二話 わが国のお齒黒文化とあるが、第三話は入れ齒の史話、第四話 日本における齒磨きの歴史、第五話 齒吹如来像の謎、第六話 齒の字の話、第七話 近代歯科医学の先覚者からなっている。

齒に宝石を飾るマヤ族の風習、生きた齒を抜く風習(欠齒)、生齒を削つた風俗や日本のお齒黒文化で、お齒黒の起源、男子のお齒黒、江戸の女子お齒黒の風俗から日本文学の古典にみられるお齒黒の話など齒にまつわる古今東西の歴史秘話から書き起こし、次いで、延宝三年(一六七五)に没した柳生飛騨守宗冬の墓から発見された木床上下顎総入れ齒が端緒となり、当時瀧澤馬琴、杉田玄白、本居宣長らが実際に使用して